

<書評と紹介> 村上直編 『高尾山薬王院文書を紐とく』

木村, 涼 / KIMURA, Ryo

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

65

(開始ページ / Start Page)

52

(終了ページ / End Page)

54

(発行年 / Year)

2006-03-24

村上 直編

『高尾山薬王院文書を紐とく』

木村 涼

本書は、法政大学名誉教授村上直氏とその門下生である外山徹氏、岩橋清美氏、吉岡孝氏によつて、高尾山薬王院の歴史を、薬王院文書をもとに、「第一講 戦国期の文書」から「第四三講 薬王院本堂の再建」までの講に分けて解説されている。歴史研究の専門書としてだけでなく、一般書としても読めるよう配慮のなされた一書である。

まず本書が出版に至るまでの経緯を簡単に記しておきたい。高尾山薬王院文書は、現在四五〇〇点以上存在する。昭和六一年（一九八六）七月から、村上直氏を中心に調査団が結成され、平成四年（一九九二）三月にかけて二五七三点を整理し、一二項目別の分類が行われた。さらにその中の七一四点について解説及び解説をして平成元年一〇月から平成四年三月までに出版されたのが、『高尾山薬王院文書』（法政大学多摩図書館地方資料室）第一巻（第三巻である。また、より多くの人々に高尾山薬王院文書を理

解してもらうために平成一〇年一〇月に出版されたのが、『近世高尾山史の研究』（名著出版）である。そして薬王院文書を多くの人々の共有財産として、歴史の中で広く寺院の果たした役割を再確認していきたいと連載されたのが、『高尾山報』である。この連載は、平成一〇年八月から五年間で六〇回に及んだ。この六〇回の連載を収録したのが本書である。

真言宗智山派大本山である高尾山薬王院有喜寺は、成田山新勝寺、川崎大師平間寺と共に、関東三山の一角を占める名刹である。飯縄大権現を本尊としており、弘法大師作と伝えられている不動明王像が現存している。戦国時代には後北条氏によつて厚く保護され、江戸時代になると山岳信仰の霊場として広く信仰を集めるようになった。明治時代以降は、多摩地域の発展と密接な関係をもちながら現在に至っている。

本書の内容構成は、次の通りである。

- 第一講 戦国期の文書
- 第二講 上杉謙信の関東遠征
- 第三講 高尾山と北条氏照
- 第四講 高尾山の竹木伐採の禁止
- 第五講 江戸幕府の寺院政策
- 第六講 高尾山中の通り抜け禁止
- 第七講 寛永の薬王院再興
- 第八講 薬王院の寺領朱印高の確定
- 第九講 山林の利用と争い
- 第一〇講 寺領の鉄砲取締り

- 第一一講 談林の再興
 第一二講 不思議な帳簿
 第一三講 江戸中期の御影供執行
 第一四講 薬王院と紀州徳川家
 第一五講 高尾山と富士参詣
 第一六講 寺領安堵状の更新
 第一七講 報恩講にみる僧侶の学問
 第一八講 上栲田村・上長房村の百姓、甲州道中に鳥居を建てる
 第一九講 将軍との儀礼
 第二〇講 和歌山藩主徳川重倫直筆書状
 第二一講 湯島天神における開帳
 第二二講 紀州徳川家と薬王院
 第二三講 宝篋印塔建立と足袋屋清八
 第二四講 飯縄大権現にせしおり事件
 第二五講 高尾山の信仰圏
 第二六講 出開帳と足袋屋清八
 第二七講 護摩札配札の取次者
 第二八講 一ノ鳥居の再建と平原大工
 第二九講 京都大覚寺と薬王院
 第三〇講 薬王院の江戸での信徒交流
 第三一講 尾張徳川家との交渉
 第三二講 毘毳滝での商い
 第三三講 高尾山内での茶屋商い

書評と紹介

- 第三四講 両国回向院における開帳
 第三五講 東禅寺事件と山内の取締り
 第三六講 上長房村市五郎、行沢入で商売を願ひ出る
 第三七講 薬王院の侍奉公人
 第三八講 薬王院の護摩札配札行
 第三九講 村の高尾講
 第四〇講 高尾山と神仏分離
 第四一講 十九世紀の高尾山境内伽藍
 第四二講 明治二十三年の居開帳
 第四三講 薬王院本堂の再建
- 以上、四三講から成り、各講は、四〇一〇頁程でまとめられている。膨大な史料の中から特徴的な古文書を選び、それに説明を加えたものである。四三講の文書分類項目の解説については、本書の「閉講にあたって」において記載がみられる。それによると、「戦国期」が三、「寺暦・住職」が一、「諸寺院」が一、「末寺」が一、「幕府・明治政府」が四、「紀州藩」が三、「寺院行事」が一、「信仰」が九、「寺院経営」が五、「寺中」が六、「寺領」が七、「絵図」が一、それ以外として第四三講「薬王院本堂の再建」が新史料としてあげられており、内容が多岐に渡っている。紙面の都合上、全講に渡る言及には無理があるので、ここでは高尾山薬王院の江戸出開帳と個人の高尾山薬王院に対する信仰活動を中心とした内容に触れていきたい。
- 高尾山薬王院有喜寺と同じ宗派（真言宗智山派）である成田山新勝寺は、筆者自身の研究フィールドの一つである。成田山新勝

寺も薬王院と同様に布教活動の一つとして、江戸において出開帳を行っている。江戸時代、成田山の江戸出開帳は、元禄一六年（一七〇三）から安政三年（一八五六）までの間で一〇回開催されているが、場所は全て深川永代寺であった。

一方、本書「第二六講」にみられるように、高尾山薬王院の江戸出開帳は四回行なわれている。まず元文三年（一七三八）四月一日から本所大仏勧化所の八〇日間を皮切りに、寛政三年（一七九二）三月一日から湯島天神において六〇日間、文政四年（一八二一）三月一日から新宿太宗寺において七三日間、最後は文久元年（一八六一）三月三日から両国回向院において六〇日間であった。江戸出開帳は繁華な地で行われていたが、全て別の場所であった。両寺院の江戸出開帳には、このように開催の場所や回数等にも相違がみられるように、出開帳については、それぞれの寺院によって特徴がある。各地域の寺院と薬王院の出開帳の在り方を比較・検討することも地域研究には有効となろう。

薬王院への信仰活動については興味深いのは、「第二三講」と「第二六講」を中心に登場する足袋屋清八という存在である。清八は、江戸赤坂裏伝馬町二丁目に居住し、元亀元年（一五七〇）、北条氏康が高尾山に寄進した宝篋印塔が大風によって破壊された折には、清八が願主となり世話人九人で再建した。その他にも享和三年（一八〇三）九月には、清八が願主となり高尾山の榜木を立て、文化一〇年（一八一三）一月には、高尾山路の石標を千人町に建設している。

高尾山薬王院の文政四年（一八二一）三月からの新宿太宗寺に

おいての出開帳時には、紀州藩との交渉役を勤めている。さらに高尾山信仰の信者を組織し、「清八講中」を組織している。以上のことから清八が高尾山薬王院の熱心な信者の一人であり、活発な信仰活動を行っていたことは明白である。

清八という個人の薬王院への信仰活動が、具体的に文書に残されていることの価値は大きい。開帳や講の活動において、薬王院への信仰を、個人がどのように表していたかが確認できるからである。

従来の研究では、人々を、個人としてよりも集団としてとらえてきた傾向があるが、近年では、人々を個々の人としてとらえ、その人物の持っている個性、人格を検討し、当該期の時代像に位置づける研究も進められている。

本書においても、清八の例のように、個人を中心に取りあげている文書が残され、解説されている講がある。そこでは、集団ではとらえきれない個性や人格をうかがい知ることができる。読者の探求心や想像力をより広げてくれるはずである。

もとより門外漢の筆者であるが、薬王院の江戸出開帳の在り方や足袋屋清八の薬王院に対する具体的な信仰活動に、特に興味を惹かれ、それらについて簡単に述べてきた。本書は、前述したとおり、各講ごとに事例がわかりやすくまとめられており、歴史研究者はもちろん、歴史に興味をもつ読者が、地域の歴史を紐解く上で、有益な手掛かりを得ることのできる貴重な一冊となるであろう。

「二〇〇五年六月刊 二三一頁 一九〇〇円＋税 ふこく出版」